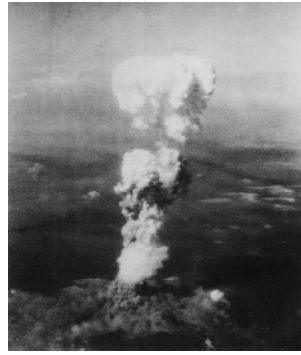
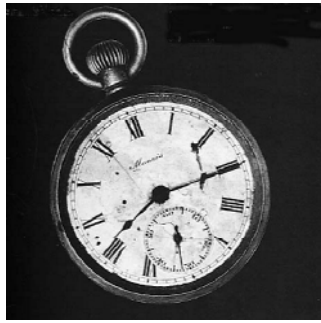
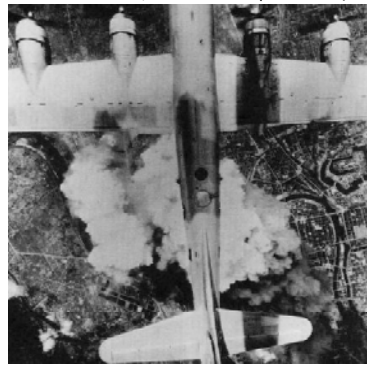
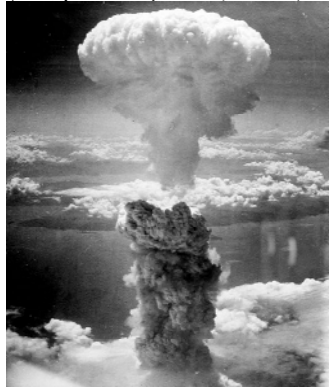


66年前 昭和20年8月6日 午前8時15分



昭和20年8月9日

午前11時2分 長崎に 昭和20年8月15日 戦争が終わる



学童疎開 (がくどうそかい)



### 学童疎開

いよいよ電車に乗り、親たちの姿がどんどん遠のいて行った時、小さい子たちは堰(せき)を切ったように泣きじゃくり、6年生なのだからと必死に唇をかんでがまんしていた私も、涙があふれてどうしようもなくなりました。

「いつまで親と離ればなれになるのか分からず、悲しかった。でも勝つまではとがまんした」。先の見えない生活で、覚悟(かくご)も必要だった。お寺では約40人が寝食(しんしょく)を共にした。午前6時半に起床し、家族がいる広島にあいさつ。午前8時から午後3時半までは、学校で勉強した。

「最上級生として、下級生の面倒を見なくてはいけないという責任感があった」。夜になると子どもたちは親が恋しくて泣き始める。「戦争が終わるまでがんばろうね。泣くのはよそうね。」と、一生懸命なだめた。「自分は泣いたり、弱音を吐いたりしなかった」しかし、父や母を思い、布団の中で泣いた。

原爆投下の1か月前、両親が会いに来た。「見送りの時に『大丈夫だよ。心配いらないよ』って強気に言ったが、本当は一緒に行きたくて、しゃくり上げながら大泣きした。」それが父との最後の別れとなった。

8月6日午前8時15分。朝から草刈りをしていると、突如(とつじょ)空に「ピカッ」と閃光(せんこう)が走った。「その瞬間に顔に熱さを感じ、びっくりして皆が伏せた。何秒後かに『ドーン』と地響きがして、広島の方角を見たらキノコ雲が上がっていた」。太陽と地球がぶつかったかと思うほどの衝撃だった。

広島との連絡が途絶え、市内の様子を見に行った教頭先生から新型爆弾が落とされたことを告げられた。次第に、皮膚が焼けただけ、ボロボロの服を着た家族が迎えに来るようになり、母も1人で現れた。「どうしてお父ちゃんと一緒にじゃないの。やっぱりだめだったの。」母にしがみつ、繰り返し繰り返し尋ねた。母はやけどだけで助かったが、爆心地近くで働いていた父は帰らぬ人となっていた。

終戦後、母と市内を歩いた時のことは忘れられない。きちんとした建物が並び、市電が走るなじみの光景は跡形もなく、見たことのない広島が広がっていた。焼け焦げた牛が転がり、完全な焼け野原だった。

### 疎開先での食事

お米がわずかにはいった雑炊(ぞうすい)、すいとん、さつまいも、じゃが芋、かぼちゃ等、肉、魚はほとんどなかった。子どもたちにとって、お腹いっぱい食べることは夢の中のことになり、いつも空腹な状態だった。中には、歯磨き粉や絵の具をなめて、空腹をまぎらわしたりした子どももいた。

少ない食糧を無駄(むだ)にしないよう一口40~60回かむように指導された。疎開した子どもたちの体重は減り続けた。

その当時の6年生の平均体重が27.0kg~29.0kgだった。という資料が残っている。

### うましめんかな

こわれたビルディングの地下室の夜だった。

原子爆弾の負傷者たちは

ローソク一本ない暗い地下室を

うずめて、いっぱいだった。

生ぐさい血のにおい、死臭。

汗くさい人いさげ、うめきごえ

その中からふしぎな声が聞こえてきた。

「赤ん坊が生まれる」というのだ。

この地獄の底のような地下室で

今、若い女が産気づいているのだ。

マッチ一本ないくらがり

どうしたらいいのだろう

人々は自分の痛みを忘れて気づかった。

と、「私が産婆です。私が生まれませしょう」

と、言ったのは

さっきまでうめいていた重傷者だ。

かくて くらがりの地獄の底で

新しい命は生まれた

かくて あかつきを待たず産婆は

血まみれのまま死んだ。

うましめんかな

うましめんかな

おのが命捨つとも



強く たくましく  
そして やさしく  
生きぬいた  
子どもたち



これらの写真から、戦争中、そして、戦後を生きぬき、日本を復興させた 強さ、たくましさ、そして、やさしさを感じませんか。

